

## 筏師と川並

細田木材工業(株)

顧問 細田 安治

前月号で木場の角乗り見物についてご紹介したが本号でも木場の伝統を担ってきた川並さん(以下敬称略)についてレポートします。

一口に川並と言っても、すべて同じ仕事をしているのではない。仕事は全く違う。筏師と川並の二つに大きくわかれる。

川並と言っても木場式に言えば、木場の流通を担い、同じ丸太や角材を扱う職人たちはそれぞれ役割、つまり仕事が違う。仕事によって筏師と川並に分かれる。このことは木場の人達の間でも、意外と知られていない。一口に川並として見ている。ところがどっこい、筏師と川並は大違いだ。簡単に説明すると

- 筏師とは、東京港に入港する輸入丸太の本船からの沖取りをはじめ、丸太をまとめて筏に組み、曳航する仕事、つまり丸太を「まとめて筏にして運ぶ」仕事を言う。
- 川並とは、川並鳶ともいわれ筏師が運んできた丸太を「仕分け等級分け、樹種検品」し、輸入商社の社員や問屋の番頭よりも「目利きもの」と言われている責任ある権威者を言う。

### ◇本船沖取り

木場の流通を担ったのは、製材工場の飯のタネの丸太を運んでくれる筏師たちだ。

細田は当時、原木は南洋材のラワン、アピトン等を製材していたので南洋材の運搬について説明する。

筏師たちの仕事はいくつかあるが花形は、海外から大型木材専用船で運んできた外材を東京湾で取り扱う本船沖取りであろう。水面に下ろされた丸太や角材を素早く筏組して税関堀まで運ぶ仕事だ。

本船の沖取りとはこのように輸入の第一線の仕事としている大変重要な仕事である。大型貨物船と言っても当時は、高度成長真っただなかである。丸太を持ってきたほうが勝ちの時代であった。南洋材専門問屋の大手は、自前の専用船として、甲板なしの箱のような形の運搬船を用意し、大量のラワンやアピトン丸太を、目いっぱい山のように積んで東京港へ入港してくる。

当時東京港、横浜港の荷役を請け負っていた大手の筏会社は、東京港筏、東港運輸、豊組の三社が牛耳っていたが、仕事をするのは、中小の組単位の筏師たちだ。

### ◇筏師は軽業師

筏師は本船が着くと、仕事の前の段取りとして、本船前に丸太の流失を防ぐため、大きくアバを三方方向に回して、大きなプールのような水面を作る。このアバが筏師の仕事場だ。なぜ「三方回し」かと言えば、一方は曳船を出入りさせ筏を曳航するための開口部、つまり筏の出口が開口部である。下手をすると開口部から丸太が流れ出す恐れがあり、筏師の仕事は本船の荷下ろし、潮の干満、丸太の保全など大変な仕事である。しかも、足元は安定しない丸太の上である。サーカスの軽業師のような仕事である。

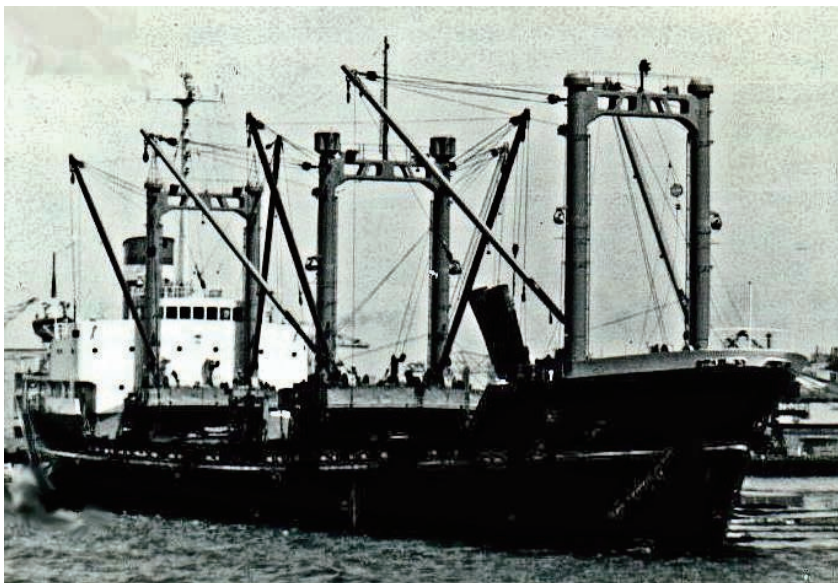
筏師の中でもすばしこく、しかも丸太を自由自在に扱えて、その上竿一本で丸太を自由自在に動かす腕力がなければできない仕事だ。角乗の芸もこんな鍛錬と敏捷さと腕力が下地となっているのではないか。

#### ◇船から丸太を投げ下ろす

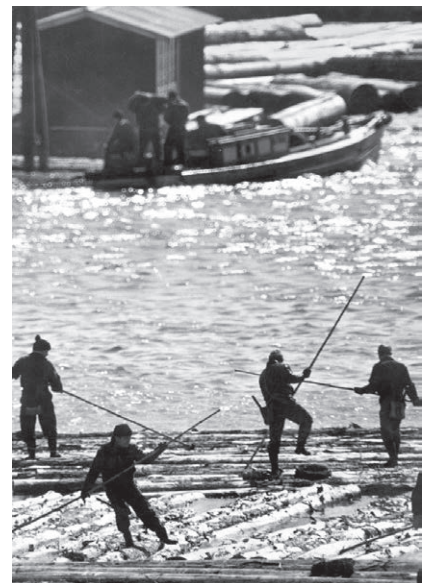
本船の方は複数のクレーンで片っ端から、海に下ろす。下ろすというより、海に放り込むような勢いで、ラワン丸太をドボンドボンと水しぶきをあげて下ろす、下ろすというより放り込んでくるような勢いだ。船も筏師も安全に注意しながらの作業だが、この作業は危険が伴う「命がけ」の仕事だ。筏師は丸太が大きく動いている水面の丸太を纏めて固定させる大変な作業だ。

#### ◇素早く筏組み

本船取りの作業での筏組は、普通の筏組（縦長に丸太を固定し筏にする）は出来ない。してはられない。時間がない。次から次へ下ろされてくる丸太を固定するだけで精いっぱいだ。やっている時間がない。どんどん丸太が下ろされてくる。足元は波で安定せず、竿1本で丸太を操り、長さ2間半くらい迄の定尺丸太は横に並べ、ワイヤーを並べて又カンで素早く固定する。カンは1本では、波にあおられて抜けてしまう。必ず十字に打つ。間に合わないと波に<sup>あお</sup>られカンを抜け筏はばれてしまう。下ろす船側の作業者は、荒っぽい外国人の船員が多く、下の仕事はお構いなしにどんどん下ろす。筏師は足が滑り海に落ち丸太に挟まれば、下手をすればあの世行きとなる。本船取りの筏師は、すばしこく、身が軽く、仕事が早い者でなければ務まらない仕事だ。次は又カンを止めた筏をアバから出さなければならない。アバが一杯になれば仕事が止まってしまう。曳き船に筏を連結して、大急ぎでアバから出さなければならない。



丸太下ろし中の木材専用船



本船沖とり中の筏師たち

#### ◇税関堀で通関と検疫

本船取りした筏は、筏師により税関堀へ運ばれここで通関が行われる。国が輸入税を徴収するために寸法を測り材積を出さなければならない。ここからがいよいよ川並の登場となる。手板(明細書)、つまりオリジナルインボイスと照合しながら、丸太を1本、1本チェックしていく。これは目利きが必要な仕事だ。単に目で視てこの樹種は間違いはないか、スケールを当て「寸法は間違いはないか」だけではない。「傷がないか」。傷があれば傷引き(傷の分だけ寸法をひいてある。つまり材積を少なく)してあるか。丸太半分の浮き面(つら)はよいが、見えない半分の沈み面はどうなっているか。水の下は見えない。そこで丸太をトビでひと回しして確認する。無欠点の丸太は、ポカンとバランスよく浮いている。半分以上浮いている丸太は良い丸太とみてよい。しかし、「だまされるな」浮きが良すぎるのは立ち枯れ丸太(立木時代に枯れ木となっている)かもしれない。反対に沈み面が多い丸太は下に何かがある。節や、腐れが隠れている。また、産地により木の質が違うので産地の確認をしなければならない。ここで長年の経験と勉強の成果が出る。つまり、経験知の勝負になってくる。優れた川並は、輸入商社の社員や問屋の番頭より優れた目利きとも言われている。まず、産地、シッパー、輸入商社、いつ産地を出港したか。などなどの書類確認と経験値による現物確認をする。丸太を買う方は、力関係で残念ながら仕入れてから、自前の川並により確認するが、この時点では寸法の確認のみで品質についてはノークレームだ。

更に検疫消毒が行われ、始めて入国となる。ここからビジネスが始まる。

#### ◇銘柄相場

ここで産地、シッパー、輸入商社別に銘柄が出来上がり、相場となって取引が進む。この銘柄で相場が形成され取引が始まる。この値段を決めるのは売り手の商社と問屋たちだ。輸入商社から一次問屋、二次問屋を経由して製材業者に配給される。配給とは戦時中のような言葉だが、実際問題として、配給、いや供給は以上のような流通ルートを経なければ手に入らない。配給と同じではないでしょうか。持ってきたほうが勝ちの完全売り手市場のため、値段も現物も「あてがいぶち」、戦時中と同じ流通であった。これらの流通ルートにすべて川並が関わっている。

#### ◇税関堀から私有堀へ

ここで商いが始まり、割り当てのため、あっという間に完売となってしまう。今考えればよくもこのような商売が成立したと思う。このような配給制度の丸太を買っていた我々製材業者が、よくもやってこれたものだ。と思う次第です。一旦丸太が製品になれば、売り手市場どころか、今度は、お客様の買い手市場であり、我々生産者は買う方は配給、売る方は売り手市場よくもやってこれたものだ。だからこそ、この稿の川並たちの役割、優れた目利きの川並の存在が大きな価値を担っていた。言わば川並は行司役、公平に商いのルールを守る番人の役割を務めてくれた。丸太流通の行司役、川並さんには感謝を申し上げる。

本論に戻ろう



#### ◇工場までの運搬

これがまた、大変な仕事だ。何十枚も筏を曳いて、曳船が川を上ってくる。すべて上げ潮時間だ、潮は一日に2度変わる。貯木場にある筏を上げ、潮に乗り潮流が上げ潮の間に目的地の製材工場や、合板工場まで何十枚も引っ張ってくる筏師のお相手をしていた。

筆者も若いころは、「河岸揚げ」と称する仕事をしてきたから筏師と関わりを持ち、彼らのご苦勞がいまでも思い出される。ここで紙数が尽きた。次号へ繰り越す。 続く



筏曳航中の筏師たち



角乗伝統業